

シナリオ「北区の女」
決定稿・イワモトケンチ

㊦一 王子駅・南口（昼）

駅から出てくる、美和子（十九）。
メインタイトル「北区の女」

㊦二 王子駅・南口・自転車置場（昼）

自転車置場で自分の自転車の鍵を外す、美和子。
美和子の声「わたしの実家は古くから北区の栄町という
町で青果店を営んでいます。わたしの父が二代
目になります。…けれども」

㊦三 栄町・路地（昼）

自転車に乗って走る、美和子。
美和子の声「古いお店は一年程前に建て替えて、今は給
湯器のある快適な生活です」

㊦四 栄町・踏み切り（昼）

都電の通過を待つ、美和子。
遠くに新幹線が通過するのが見える。
美和子の声「栄町も昔はとてにぎやかな町だったと聞
きます。けれども、今はその陰もありません。
母はよく栄町のことをサビレ町と冗談のよう
に言います」

㊦五 青果店・前（昼）

美和子の声「確かにサビレ町なんだけど、わたしはこの
町が好きです」
自転車に乗った美和子、店の前で自転車を降り
る。

美和子

「ただいまー」

父

店から走って出てくる、美和子の父（四七）。
「あ。美和子。よかった。配達、行くから店番、頼む」

美和子

「お母さんは？」

父

「ああ。あれだ。髪の毛やり行ったから。」

美和子

「うん」

父

父、車に乗り込んでエンジンをかける。

父

「じゃ。頼んだ」

父

父の乗ったバン、走り出す。

美和子

美和子、父の車に手を振っている。

美和子

「いつてらっしやい」

美和子、自転車のスタンドを立てて店内に入っていく。

売り物のジュースが入っている冷蔵庫から

ジュースを飲みながら奥へ歩き、レジの前

に座る。

青果店の斜め向かいにコンビニエンス・ストアがある。

そこから出てくる、斎藤（男・二三）。手にはコンビニの袋。

青果店の前を通過して行く、斎藤。

美和子、斎藤を見て反応する。

「あ！いい感じの人だっ」

立ち上がった店先に出る、美和子。

斎藤、路地を右に曲がる。

美和子、見ている。おばさんパーマをかけた母

（四二）が帰ってくる。

「美和子、なにやってるの？」

「ん？（振り向く）」

美和子、母の頭を見て笑う。

「なによ！」

「やりすぎ」

「へん？」

「変。すごく変。三億年くらい変」

美和子

母

美和子

母

美和子

美和子

母

「ええ？三億年？」

母、慌てて店内に入り、奥の鏡で自分の髪をチエツクする。

美和子

「お母さん、店番、もういいでしょ？」

母

「いけてるじゃない。素敵な感じじゃないの」

美和子

「ちよつと、散歩してくる」

美和子、歩き出す。

母

母、鏡の前で髪を必死にチエツクし続けている。
「いけてるいけてる。まだまだ現役だわ……」

♀六 飛鳥山公園（昼）

美和子

お城の滑り台の上でぼーとしている、美和子。

「あーあ。凧上げしたいなあ……」

齋藤が缶コーヒートを飲みながら滑り台の下を通過して行く。手にはコンビニの袋。

顔を上げて齋藤を見る、美和子。

美和子

「お！いい感じの人だ」

美和子、にやりと笑う。

急いで長い滑り台を猛スピードで滑り降りる。

美和子、齋藤の前に滑り出る。

齋藤、美和子を見る。

美和子、笑う。

美和子

「こんにちわー」

齋藤、振り向いて誰がいるか確認する。

後ろには誰もいない。

もう一度、美和子を見る、齋藤。

笑い続けている、美和子。

齋藤

「大丈夫ですか？どこか具合でも？」

美和子

「突然ですみませんが、わたしと一緒に凧上げしてもらえませんか？」

齋藤

「凧上げ？」

美和子

「わたし、凧上げが大好きなんですけど、ひとりですと、ホラ、ちよつと変じゃないですか。凧上げて」

齋藤

「凧上げを、ひとりで……」

斎藤、想像してみる。

㊦七 河川敷（昼）

想像図

美和子、笑いながら走って凧を上げている。
美和子 「あははは。これだから凧上げは止められねえや！楽しくて死んじゃいそうだけ！がははははは」
笑いながら走り続ける、美和子。凧はくるくると回転するだけで上へは上がらない。

㊦八 飛鳥山公園（昼）

美和子、笑っている。
斎藤、美和子を軽蔑したような目つきで見る。
斎藤 「確かに変だ」
美和子 「だから、一緒に…お願いします」
斎藤 「うーん」
美和子 「忙しい？」
斎藤 「いや。特に…」
美和子 「だと思った。わたし分かるんです。暇な人が。なんか同類の電波というか…」
美和子の顔をじっと見る、斎藤。
斎藤 「同類？」

㊦九 おもちゃ屋（昼）

凧（ゲリラカイト）と凧糸を買う、二人。
斎藤の声 「…そうか。君はあの青果店の…」
美和子の声 「箱入り娘」
斎藤の声 「（笑う）」
二人、おもちゃ屋から凧を持って出てくる。

㊦一〇 河川敷（昼）

土手の上を歩く二人。
斎藤 「どこまで行くの？」
美和子、周りを見回す。

美和子 「うーん。ここでOK。いいロケーションだ」

斎藤も周りを見る。

斎藤 「へー。ゴルフ場か」

美和子 「はじめて来たの？」

斎藤 「うん。はじめて」

美和子 「ふーん」

斎藤 「仕事が忙がしくて散歩なんかする暇なかつたから」

美和子 「今日は？平日だよ」

斎藤 「いや。辞めたんだ。会社」

美和子 「いつ？」

斎藤 「一昨日」

美和子 「へー」

「急に暇になると、なにしているかわからないんだね。忙しい時はいろいろ想像したけど、三日目にしてもうやることなくなつてしまつて……」

美和子 「そう？することいっぱいあると思うけどな」

斎藤 「例えば？」

美和子 「公園で何にもしないてぼーとしたり。これはまあ、六時間は余裕でいける」

斎藤 「公園で六時間？」

美和子 「さつきもそれしてたんだけどね。あのお城の滑り台の上、わたしの特等席なの」

斎藤 「僕には無理だ。飽きちゃうよ、そんなの」

美和子 「そんなことないよ。慣れるし」

斎藤 「慣れる？何に？」

美和子 「暇に」

斎藤 「（首を傾げる）よくわからない……」

美和子 「ようし！（嬉しそうに）あげるぞー」

美和子、走り出して凧を上げる。

斎藤、その場に立ち止まったまま見ている。

凧、上がって行く。

美和子、凧糸を素早くのぼして行く。

凧、上がって行く。

斎藤、見上げている。

美和子 「ねえ、凧系取って」

斎藤 「え？」

美和子 「その袋に入ってるでしょ」

斎藤、おもちゃ屋の包みを開ける。

凧系が二〇個近く入っている。

美和子 「早く。もう糸がないよー」

斎藤、凧系を包みから取り出しながら美和子に近づく。

斎藤 「これ、どうするの？」

美和子 「つなげてどんどん高く上げるの」

斎藤 「これ、全部？」

美和子 「いいから、早くちようだい」

斎藤、凧系を美和子に渡す。

美和子の手、凧系を受け取る。

美和子 「ちよつとこれ持ってて」

美和子、斎藤に凧を渡す。

斎藤 「ああ」

凧を受け取り、凧上げする斎藤。

美和子、凧系をほどいて斎藤の持つ凧系とを結ぶ。

美和子 「さあ。どんどん行くから上げて上げて」

斎藤 「ああ」

斎藤、凧系をのばして行く。

斎藤の表情が和らぐ。

斎藤 「結構、面白いね。これ」

美和子 「小さくなって行く、凧。」

美和子 「でしょ」

更に凧系を結ぶ、美和子。

凧系をのばして行く、斎藤。

更に小さくなって行く、凧。

更に更に凧系を結ぶ、美和子。

更に更に小さくなって行く、斎藤。

更に更に更に小さくなって行く、凧。

更に更に更に更に小さくなって行く、美和子。

更に更に更に更に更に小さくなって行く、斎藤。

更に更に更に更に更に更に小さくなって行く、凧。

美和子 「（空を見上げて）よしよし。いい感じいい感じ」

斎藤 「ああ！」

斎藤 斎藤、凧に引かれてよろよろと歩き出す。

斎藤 「ねえ。すごい力だよ。おお……」

斎藤 斎藤、さらによろよると歩いて行く。

美和子 「まだ凧糸いっぱいあるんだから。がんばって」

斎藤 「ああ！足が勝手に……」

斎藤 斎藤、突然風にあおられて走り出す。

美和子 美和子、後を追う。

美和子 「何してるの？すっかり腰を落として」

斎藤 「ああ！痛い痛い。だめだ。離すよ」

美和子 と言いながら走って行く、斎藤。

美和子 「だめ！わたしが代わるから待って！」

美和子 と言いながら後を追う。

斎藤 「あっ！」

斎藤 斎藤、思わず凧を離す。

美和子 凧、飛んで行く。

美和子 「あ！凧……」

美和子 美和子、呆然と立ち尽くして空を見上げている。

斎藤 斎藤も見上げたまま動かない。

§ 二 実景・河川敷（夜）

対岸のネオンが点滅している。

斎藤 「ごめん。落ち込んでる？」

美和子 「少し」

斎藤 「別の凧、買ってあげるから」

§ 三 実景・栄町・踏み切り（夜）

美和子 「目玉のあるやつがいい」

斎藤 「ああ。目玉のやつね」

§ 一三 飛鳥山公園（昼）

お城の滑り台の上でぼーとしている、美和子。
斎藤が滑り台の階段を昇り、顔を出す。

斎藤

「やつぱりここにいたか……」

美和子

美和子、振り向く。

「昨日は凧が世話になりました」

斎藤

「失礼しました」

美和子の横に座る、斎藤。

美和子

「四日目？」

斎藤

「暇人になって四日目」

美和子

「（笑って）ああ」

斎藤

「慣れた？」

美和子

「慣れたら仕事できなくなるよ」

斎藤

「それもいいんじゃない？」

美和子

「どうやって食べていくんだよ」

美和子

「ステレオとかテレビとかビデオとか、あるで
しょ」

斎藤

「なにが？」

美和子

「それ売れば一ヶ月いける」

斎藤

「そんなことしたことがあるの？」

美和子

「まさか。わたしは実家だから余裕だもん」

斎藤

「聞いた話？」

美和子

「考えた話」

斎藤

「想像か」

美和子

「売るものがない時は、ほら、パン屋さん
でパンの耳。あれただでくれるから」

斎藤

「それも考えたの？」

美和子

「ここでこうして六時間もいるといろんな
こと思いつくの」

斎藤

「なるほど」

美和子

「ただど、ひとり暮らしの人は家賃がある
から大変」

斎藤

「家賃を払わなくていい手はないの？」

美和子 「家とか持つてる女と結婚する」
斎藤 「（呆れて）なるほど」
美和子 「今日はピクニックにしようか？」
斎藤 「ピクニック？」
美和子 「うん」

§一四 スーパーマーケット（昼）

スーパーに入つて行く、二人。
斎藤 「今日は凧上げしないの？」
美和子 「すごく楽しいことは毎日やるともつたいないから」
斎藤 「意外と謙虚なんだね」

§一五 河川敷（昼）

土手に座り、対岸を見ている二人。
美和子 「いいでしょう…この充実した感じ…」
斎藤 「（そつけなく）そうだね」
美和子 「だめ？まだ慣れないの？」
斎藤 「ねえ。君つて何してる人？」
美和子 「何つて、大学生だよ」
斎藤 「え？そうなの」
美和子 「流行らない女子大生」
斎藤 「学校、いつ行つてるの？」
美和子 「時々ね」
斎藤 「親とか、怒らないの？」
美和子 「怒らないよ。ちゃんと行つてることになつてから」
斎藤 「嘘ついて毎日ぶらぶらしてるんだ…」
美和子、ビニール袋からゆで卵を取り出す。
美和子 「食べる？ゆで卵」
斎藤 「いらない」
美和子 「どうして？」
斎藤 「嫌いなんだ」
美和子 「ふーん」
美和子、斎藤の頭で卵を割る。

齋藤 「いてっ」

美和子、ゆで卵をむき始める。

「ゆで卵ってかわいい。つるつるでぷにぷにゆ。何、考えててるんだろう。このぷにぷにぷに」

齋藤 「ねえ。烏龍茶ちょうだい」

美和子 「うん」

美和子、ゆで卵を持ったままビニール袋から烏龍茶を出す。

齋藤に烏龍茶を渡す。

美和子 「はい」

齋藤 「ありがとう」

齋藤、烏龍茶をの蓋を開けて、飲む。

美和子、ゆで卵にテーブル食塩で塩をかける。齋藤、その様子を盗み見ている。

齋藤 「かけ過ぎ」

美和子 「そう？」

と言いながらゆで卵をぱくりとやる。

おいしそうにゆで卵を食べる、美和子。

その様子を見ている、齋藤。

齋藤 「ほんとうにおいそうに食べるね」

美和子 「そう？普通だよ」

ゆで卵をもう一口食べる、美和子。

齋藤 「ねえ」

「（もぐもぐしながら）ん？」

「バナナちょうだい。君を見てたらお腹空いてきちゃったよ」

美和子 「うん」

美和子、ビニール袋からバナナを取り出す。

丸ごと齋藤に渡そうとする、美和子。

受け取るうとする、齋藤。

美和子 「あ！」

齋藤、驚いて美和子を見る。

齋藤 「どうしたの？」

美和子 「うち青果店なのにバナナなんかスーパーで買ったりにしてバカみたい」

斎藤 「そうか。それはバカかも知れない」
美和子 「バカ？バカって言うな！」
斎藤 「自分で言ったくせに」
美和子 「自分で言うバカと他人に言われるバカとは意味が違うもの」
斎藤 「バカはバカだから。バカでしょ」
美和子 「（ムキになって）わたしはバカじゃないもの」
斎藤 美和子、立ち上がる。
美和子 「ムキになって」わたしはバカじゃないもの」
斎藤 美和子を呆れて見上げる。
斎藤 「ねえ」
美和子 「なに！」
斎藤 「口にたまごの黄身ついてるよ」
美和子 「え？」
美和子、手で慌てて自分の口を拭く。
斎藤 「嘘」
美和子 「あ」
斎藤、笑う。
美和子 「なんか、すごく悔しい！」
斎藤、立ち上がる。
斎藤 「行こうか」
美和子、歩き出す、斎藤。
美和子 「（心配そうに）用事でもあるの？」
斎藤、歩き出す、美和子。
斎藤 「いや」
美和子 「じゃあ、どうして？」
斎藤 「なんとなく」
美和子、土手下を走る「八百志津」のバン。
斎藤、運転席には美和子の父。
美和子 「あ。やばい」
斎藤 美和子、反応して斎藤の後ろに隠れる。
美和子 「え？」
斎藤 「お父さん！」
斎藤 「ん？」
美和子、土手下の車を見る、斎藤。
斎藤 父の乗ったバン、走り去って行く。
美和子 「行っちゃったよ」

隠れていた美和子、顔を出す。
土手下を見る、美和子。

美和子

「あ！」

父

父のバンが猛烈な勢いでバツクして止まる。
「こら！」

斎藤の後ろに隠れる、美和子。

猛烈な勢いでバンから降りて土手を駆け上る、父。

父

「美和子！こんな時間になにしてるんだ！
学校はどうした！」

美和子と斎藤、困っている。

父

土手の中段まで上る、父。

「美和子！その男は誰だ！」
突然、走り出す、美和子。

美和子

「ごめんなさい！」

斎藤、困っている。

父

父、斎藤に近づく。
「美和子！」
走って行く、美和子。

父、斎藤を見る。

斎藤、ぎこちなく笑ってお辞儀をする。

遠くで衝突音。

父

反応して振り向く、父と斎藤。
「ん？」

土手下のバンと衝突したらしいオートバイ
が転倒している。

父

ライダーが土手に刺さっている。
「おお。なんてこった！」

父、あわてて土手下に駆け下がる。

斎藤、啞然として土手下を見下ろしている。

＃一六 C M

＃一七 飛鳥山公園（昼）

斎藤の声

「僕もすっかり暇でいることになれてしまつて、こうしていることが苦にならなくなてしまった。それなのにあのヘンな子はあれから姿を見せなくなつた。きつと父親にひどく叱られて真面目に大学に通っているんだらう」

㊦一八 栄町・踏み切り（昼）

踏み切りを渡る、斎藤。

斎藤の声

「会えなくなつてしまつと、なんだか、淋しく感じる。僕はもしかしたらあのヘンな子のことが好きなのかも知れない」

㊦一九 青果店・前（昼）

斎藤の声

「勇気を出して、あの子の実家をのぞいてみたけど、お母さんしかいなかった。弾みでバナナを一房、買ってみた」

㊦二〇 河川敷（昼）

ひとり土手に座つてバナナを食べている、斎藤。

斎藤の声

バナナを食べながら空を見上げる、斎藤。大空に凧が舞い上がっているのが見える。「目玉の凧……」
斎藤、反応して凧を上げている人物を探す。笑いながら凧上げをしている美和子を発見する。

斎藤、立ち上がったって美和子の所へ走り出す。美和子、凧を上げ続けている。

駆け寄る、斎藤。

美和子の肩を叩く。

振り向く、美和子。

美和子

斎藤

「ああ！」
「どうした？叱られた？」

美和子 「おこずかい、三ヶ月停止の刑」

齋藤 「おお。それはきついなあ」

美和子 「ねえ。ちよつと持ってた」

美和子、凧糸を齋藤に渡そうとする。

齋藤、躊躇する。

美和子 「嫌なの？」

齋藤 「また飛ばしちゃったら、悪いから……」

美和子 「大丈夫だよ。わたしが持ってるんだから。」

美和子、齋藤に凧糸を渡す。

美和子、齋藤に凧糸を渡す。

齋藤、凧糸を受け取る。

空を見上げて凧糸をクイクイやる。

美和子 「さつきからトイレに行きたくて困ってたの。ちよつと行ってくる」

美和子、走り出す。

齋藤 「え？困るよ」

美和子、走り出す。

美和子 「大丈夫。大丈夫」

走り去る、美和子。

齋藤、困って様子で凧糸を懸命に持っている。

§二 児童公園・公衆トイレ（昼）

美和子、さっぱりした顔をしてトイレから出でくる。

手を洗う。

ハンカチで手を拭く。

走って戻る。

§三 河川敷（昼）

走って戻ってくる、美和子。

周囲を見渡す。

齋藤がどこにもいない。

美和子 「あれ？どこにいつちゃったんだろ……」

美和子、歩き出す。

㊦二三 河川敷（昼）

斎藤を探している、美和子。

美和子 「どこにもいない…」

斎藤、どこにもいない。

美和子 「凧と一緒に飛んで消えたの？」

歩き続ける、美和子。

㊦二四 栄町・踏み切り（夕）

踏み切りを渡る、美和子。

美和子の声 「まいったなあ…」

㊦二五 青果店・前（夕）

帰ってくる、美和子。

店に入っていく。

美和子 「ただいまー」

母がレジの前に座っている。

美和子 「凧と一緒に行方不明になった人のニュース

やってなかった？」

母 「（怪訝な顔をして）…え？なんだい。それ」

美和子 「うそ。じゃあ」

㊦二六 実景・栄町・路地（夜）

美和子の声 「どこにいったかったんだろう…。本当に凧と一緒に空に消えちゃったんだろうか」

㊦二七 実景・上中里J R車庫（夜）

美和子の声 「トイレなんか行かなきゃ良かった。久しぶりに会えたのに、バカみたい…」

㊦二八 飛鳥山公園（昼）

お城の滑り台の上でぼーとしている、美和子。

斎藤が現れる。

美和子、反応して下を見る。

美和子 「生きてたんだ！よかった！」

斎藤 「（笑って手を上げる）」

斎藤、滑り台の階段をのぼる。

美和子 「本当に心配したんだから。凧と一緒に空

に消えたのかと思つて」

斎藤 「そんなバカな」

美和子 「バカつて言うな！」

斎藤、美和子の横に座る。

斎藤 「それが、もう大変だったんだ……」

美和子、斎藤を見る。

§二九 河川敷（昼）

回想

斎藤の声 「風がね、強い風が吹いてきて、また引つ

張られたんだ。だけど、また凧糸、離れた

ら何言われるかわからないから、必死にな

つて押さえて……」

美和子の声 「うん」

§三〇 河川敷（昼）

回想

斎藤の声 「そしたらどんどん流されてしまつて……」

美和子の声 「うん」

斎藤、上を見ながらどんどん歩いて行く。

§三一 河川敷（夕）

回想

斎藤、上を見ながらどんどん歩いて行く。

斎藤の声 「気づいたらもう夕方、埼玉県にいたんだ」

美和子の声 「川口？」

§三二 実景・戸田市の看板（夕）

回想

斎藤の声 「いや。川口を越えて戸田まで行ってしまつて」

§三三 河川敷（夕）

回想

思わず凧糸を離す、斎藤。

飛んで行く、凧。

斎藤の声

「戸田市の看板見たら、急に怖くなつて、

凧糸離してしまつたんだ……」

§三四 飛鳥山公園（昼）

お城の滑り台の上に座っている美和子と斎藤。

美和子、大笑いしている。

「凧糸、縛ればいいのに」

「縛る？」

「そういう時は木とか石とかに縛りつけ

ばいいの」

「（嬉しそうに）そうか！」

「バカ！」

「バカつて言うな！」

「バカもバカ。大バカ。どうして凧と一緒

に戸田まで行くかなあ……」

「とにかく必死だったんだよ」

「でも……無事でよかつた」

「（苦笑いして）ああ」

「どうする？」

「ん？」

「今日はなにをやる？」

「大学、どうした」

「もうすぐ夏休みだから大丈夫」

「大丈夫じゃないだろ」

「電車がね。あれが嫌い」

「どうして」

「知らない人がいっぱいいるでしょ」

「そりゃいるさ。電車だもの」

「なんか、気まづくて。目のやり場に困る

というか」

「まあ、確かに変な空間だけ……」

斎藤

美和子

美和子 「ねえ」

美和子 「ん？」

美和子 「いつまで暇人？」

美和子 「いつまでかなあ。貯金も淋しくなってきたし、そろそろ仕事みつけないといけないんだけど……」

美和子 「辛いね。人生つてもんは」

美和子 「君のせいですっかりやる気のない人間になつてしまった」

美和子 「違うよ。もともそういう人だったのよ。でも、自分に嘘ついてごまかしてただけなの。斎藤、美和子を見る。」

美和子 「はじめでここで会った時に言ったでしょ」

美和子 「なんだっけ？」

美和子 「同類の電波」

美和子 「ああ」

美和子 「（手を叩いて）そうだ。いいこと思いついた」

美和子 「なに？」

美和子 「今からわたしのお父さんに会って」

美和子 「え？」

美和子 「わたしたち結婚するのよ」

美和子 「ええ！」

美和子 「それであの家もらいましょう」

美和子 「はい？」

美和子 「違うの。ほら、わたし女でひとりっ子でしょ。だから、あと十年くらいでお店も閉めて隠居する計画なの。あの人たち」

美和子 「うん」

美和子 「もつたいないじゃない。そんなの。あんな店だけど、学校の給食とか工場の食堂とか結構大口のお得意さん持つてるんだから」

美和子 「うん」

美和子 「やっぱり他人に使われるのって辛いし。いいと思うな」

美和子 「うん」

美和子 「斎藤、考える。」

☞三三五 青果店・前（夕）

想像図

齋藤 「ただいまー」
美和子 「お帰り。ダーリン」

☞三三六 飛鳥山公園（昼）

ニヤニヤしている、齋藤。
美和子、齋藤を見ている。
美和子 「なに考えてるの？」
齋藤 「いや。別に」
美和子 「ねえ。どうする？」
齋藤 「どうするって言われても…急にそんな、結婚だなんて…」
美和子 「そうだ。あなた、名前なんて言うの？聞くの忘れてた」
齋藤 「齋藤。齋藤勝範」
美和子 「齋藤勝範さんね…布施木勝範…うーん。ちよつと今いちな…」
齋藤 「布施木って言うの？変わった名字だね」
美和子 「うちは由緒正しい家系なのよ」
齋藤 「（美和子を見て）由緒…正しい…ねえ」

☞三三七 栄町・踏み切り（昼）

踏み切りを渡る、美和子と齋藤。
齋藤 「やつぱり気が重いなあ…やめよう」
美和子 「平気。平気」
齋藤 「平気じゃないよ」

☞三三八 青果店・前（昼）

並んで歩いてくる、美和子と齋藤。
先に店に入る、美和子。
美和子 「ただいまー」
齋藤、店先で待つ。
レジの前に母親が座っている。

母親 「お帰り」
美和子 「お父さんは？」
母親 「配達に行ってるけど」
美和子 「そう。わたし、あの人と結婚することに
したから」
母親、驚いて立ち上がる。
「ええ！」

三九 青果店・前（昼）

店の前に停まっている「八百志津」のバン。
にらみあうように店の前に立っている父と
美和子、斎藤。重い空気。

美和子 「：斎藤さん、養子になってくれるって言
うから：」

斎藤、気まずそうにしている。

父、煙草に火をつける。

美和子 「お店、わたしたちにちょうだい」

父、美和子をにらむ。

斎藤、落ち付きがない。

美和子 「いいでしょ」

父の体、震え始める。

父 「どういうつもりなんだ、美和子。こんな
やり方、ひど過ぎるぞ。おこずかいの仕返
しのつもりなのか（泣く）」

斎藤、困っている。

美和子 「泣くことないでしょ」

父、更に強く泣く。

母、心配そうに店内からのぞく。

泣き続ける、父。

斎藤 「すみません。これは悪い冗談です。やめ
ます。結婚なんかしません！」

美和子 「ええ？ そんな」

父、鋭い目で斎藤をにらむ。

父 「：冗談？：」

父、斎藤に近づく。

齋藤、数歩後退する。

父 「大事な娘をおもちゃにしやあがつて…」

父、泣きながら齋藤の胸を強く押す。

父 「ばかやろう！」

齋藤 「うわっ」

齋藤、そのまま倒れる。鈍い音がする。

母 「大丈夫？大丈夫？お父さん！大丈夫？ねえ！」

§四〇 実景・栄町・踏み切り（夜）

実景。

§四一 青果店・前（夕）

テロップ 「一年後」

店のシャッターが降りている。

礼服を着た父と母が歩いてくる。

母 「いいお式でしたね」

父 「ああ」

母 「勝範さん、美和子のお友達たちにも大人気み

父 「たいですよ」

母 「ああ」

母 「あと二〇歳若かったらわたしが結婚した

父 「いくらい」

父 「馬鹿、言っでんじやない」

§四一 ホテル・プールサイド（昼）

イタリアのホテル。

プールサイドに置かれたデッキ・チェアに

寝そべり、日光浴をしている齋藤と美和子。

それぞれ水着にサングラス姿。手には外国産の

透明瓶ビール。

美和子 「ねえ、勝範」

齋藤 「うん？」

美和子 「気持ちいいね」

斎藤 「うん」

美和子 「一生、こうしていられたらどんなに幸せな
なにか」

斎藤 「（美和子を見て）…あーあ…」

美和子 「（慌てて斎藤を見て）結婚したこと、後悔
悔してる？」

斎藤 「（向き直って）…流れだから。あきらめて
る」

美和子 「流れってなに？あきらめてるってなに？」

斎藤 「冗談だよ」

美和子 斎藤、ビールを飲む。

美和子 「（ニヤニヤして）…いよいよ初夜だね」

斎藤 「今夜はやらないよ」

美和子 「え？どうして？」

斎藤 「時差ボケで死にそう」

美和子 「だめだよ。初夜なんだからやらなきゃ」

斎藤 「別にそんなの関係ないよ」

美和子 「（怒って）関係なくないもん！大事なこ
とだもん！初夜だもん」

斎藤 「（美和子を見て）ねえ」

美和子 「え？」

斎藤 「ここに鼻糞ついてる」

美和子 「え？（鼻をのばして）どこ？」

斎藤 「ここ（鼻の下をさして）」

美和子、プールの水面で確認する。

斎藤、ゆったりとビールを飲む。

美和子 「ついてないよ…」

斎藤 「嘘でした」

美和子 「ちくしょう。またやったな！」

美和子、斎藤に向かって走り寄る。

斎藤 「どうして何度も同じ手で騙されるかなあ
…」

美和子、斎藤の膝の上に着地する。

美和子 「こらっ」

美和子 走って来た美和子、ジャンプして抱きつく

美和子 ように斎藤の膝の上に着地する。

美和子 「こらっ」

美和子 見つめ合う、二人。

いい感じでチューする。
そのままエンド・ロールが流れ始める。
いい感じでいちゃつく、二人。

【おわり】